『館結花行列』考

片　龍雨

はじめに

四世鶴屋南北は、長い下積みの後、享和三年（一八〇三）閏一月の狂言『世響音羽桜』（河原崎座）において初めて立作者の地位（当時は勝俵蔵。以下南北）に座った。しかし、享和三年の河原崎座は、麻疹の流行と役者間のもめ事による休座が続き、役者は揃っていなかったし、作者もまた手薄で、千歳軒鶴姿がスケとして同座していた。そのため井草利夫は、「名実ともに立作者になったのかどうかは疑問」（『鶴屋南北の研究』、桜楓社、一九九一年）と述べている。

一方、古井戸秀夫氏は、「鶴屋南北（三）」（『近世文芸　研究と評論』、一九八五年十一月）において、『役者大福帳』（文政十四年刊）の「此翁（南北…筆者注）勝俵蔵とて安永五申年初て狂言作者の見習に出追々出世なして享和元酉年より立作者となられ」という南北追善口上の記事を取り上げ、享和元年十一月説を述べている。

いずれにせよ、翌文化元年（一八〇四）も河原崎座に居続けた南北は、『天竺徳兵衛韓噺』を成功させ、同年の顔見世狂言『四天王楓江戸粧』において、再び立作者になる。南北は、文化二年十一月に中村座に移って、奈河七五三助に続き二枚目に座り、客座に初代桜田治助を迎え、『清和源氏一代将』（十一月）、『念力箭立相』（文化三年正月）、『館結花行列』（同四月）を書き続ける。南北の地位は、桜田治助と奈河七五三助に続く三番目であったが、古井戸氏は、右の作品の執筆に南北が中心的な役割をしたとしている（前掲論文）。

したがって文化三年は、南北の初期の作品を知るためには、重要な年である。しかし、この年の南北の台帳は、『念力箭立椙』（正月、中村座）が渥美清太郎編『日本戯曲全集第十四巻　曾我狂言合併集』（春陽堂、一九二九年）に紹介されているだけである。そこで、本稿では、『念力箭立椙』の後日狂言である『館結花行列』を取り上げ、南北の初期の作品の特徴を明らかにし、後の作品に及ぼした影響を確認する。

一　成立

本作の台帳は、早稲田大学坪内博士記念演劇博物館所蔵（登録番号、ロ16―5―3～4）のものが現存する。この台帳は、『春錦伊達染曾我』（はるのにしきだてそめそが）（寛政二年〈一七九〇〉正月、中村座）と題された帙に同作と一緒に納められている。つまり、『春錦伊達染曾我』の二冊（ロ16―5―1～2）と『館結花行列』の二冊の合計四冊が、『春錦伊達染曾我』の帙に入っている。そして帙の見返しには、「ぞうりうち／二通」と書かれた紙片が貼られている。この紙は、この二つの作品が入っていた袋の一部と思われる。両作品は、鏡山の世界を描いており、初代桜田治助が執筆に参加しているという共通性を持つ。このため、「ぞうりうち二通」として一緒に保管されたのであろう。ロ16の登録番号を持つ台帳は、中村座旧蔵とされているが[1]、中村座の関係者が一緒にしたにしろ、桜田治助が自分の関わった二作品をまとめたにしろ、両作品は同じ袋に納まり、今まで伝わったものである。

まず『館結花行列』の書誌を、簡単に紹介しておく。（以下ロ16―5―3は3、ロ16―5―4は4と表記）

〔体裁〕写本。半紙本。二冊。
〔丁数〕3・二十七丁、4・三十九丁、計六十六丁。
〔表紙〕3・寅の／三月狂言／館結花行列／第一番目五建目／長谷寺の場
4・寅の／三月狂言／館結花行列／第一番目六建目／草履打の場／仕返しの場
〔裏表紙〕3・文化三年丙寅三月大吉日／紙数廿五葉／千穐萬歳／大々叶／作者奈川七五三助。
4・文化三年丙寅三月大吉日／紙数三十七葉／千秋萬歳／大々叶　作者／勝俵蔵／桜田治助
〔行数〕3・十～十二行、4・十六～十九行。
〔その他〕各表紙に主な役者名を挙げる。
裏表紙の署名によると、立作者の奈河七五三助が五立目を、スケの桜田治助と二枚目の南北が六立目を書いたこと

になる。

鏡山物は、加賀藩の横領を謀る家臣大槻伝蔵と、それに立ち向かう忠臣前田対馬守の対立を描く加賀騒動の話と、松平周防守の屋敷で起こった下女さつの仇討ちの逸話、いわゆる草履打ちの二つの筋からなる作品の一群を言う。

加賀騒動を歌舞伎にしたのは、安永九年（一七八〇）九月京都四条通南側大芝居中山猪八座において上演された『加々見山郭写本』が早い。作者部屋には、立作者の奈河亀助と弟子の奈河七五三助がいた。その後、加賀騒動に草履打ちを加えた作品が、天明二年（一七八二）正月江戸薩摩外記座で上演された人形浄瑠璃『加々見山旧錦絵』である。作者は、容楊黛であった。翌年の四月には、森田座が容楊黛を立作者に迎え、同作品を『増補加々見山旧錦絵』の名題で歌舞伎に移した。二枚目作者は曽根正吉、三枚目は南北であった。河竹繁俊は、「思ふに、実際は大南北が増補して歌舞伎化したのではなかつたらうか」（〈加賀見山〉研究」『歌舞伎演出の研究』早川書房、一九四八年）として、『増補加々見山旧錦絵』における南北の役割を指摘している。

鏡山物を、曾我の世界の中に取り入れたのは、前掲の『春錦伊達染曾我』である。[2] 渥美清太郎は、『日本戯曲全集第十巻　初代桜田治助集』（春陽堂、一九三〇年）所収の『春錦伊達染曾我』の解説に「純歌舞伎に脚色された第一の鏡山として、極めて重要な脚本である」と同作品を高く評価している。また同氏は、「系統別歌舞伎戯曲解題」の四十六回目（『芸能』五巻二号、芸能学会編）にも『春錦伊達染曾我』を取り上げ、「〈試合〉〈烏啼き〉〈奥庭〉という、原作（浄瑠璃『加賀見山旧錦絵』…筆者注）にない場が出来たのはこの時が初めだ。（略）以後この世界は、江戸の曾我狂言の三番目ときまつた」と後の作品への影響を述べている。

そして、鏡山物の成立に大きな影響を及ぼした『加々見山郭写本』『増補加々見山旧錦絵』『春錦伊達染曾我』の三つの作品にそれぞれ関与した奈河七五三助、桜田治助、南北が合作したのが本作である。河竹繁俊は、前掲の論考において「作者は勝俵蔵、桜田治助とある。勝俵蔵は言うまでもなく鶴屋（大）南北であり、この治助は二代目である。初代は〈次助〉、二代以下は〈治助〉と署してゐることは注目すべきた。ぜんたいの清書は、二代治助と推定されるが、大南北自筆の添削が数ケ所発見されるといふ、これまた善本である」としている。つまり、治助を二代治助とした上で、南北が主に本作の六立目を書いたと考察したのである。しかし、まだこの時には初代桜田治助は生きていたし、松島半二が二代目桜田治助を襲名するのは、文化五年

のことであるので、治助は初代である。ただ、先述の通り、南北が執筆に多く関わっていたと思われるので、「大南北自筆の添削が数ケ所発見される」というのは首肯できる。

以上のように、南北は現行の歌舞伎『鏡山旧錦絵』の成立に深く関わっていた。南北が彼の代表作の一つであり、鏡山物の筋と隅田川物の筋を綯い交ぜにした『隅田川花御所染』（文化十一年三月、市村座）を書いたのも、鏡山物の成立の流れの中で、本作品があったからこそ可能であったと思われる。

二　五立目の添削

奈河七五三助が担当したとされる五立目には、治助の『春錦伊達染曾我』と類似している箇所が多い。この『館結花行列』と同じ帙に入っている台帳は、花見の場を欠いているが、別に渥美清太郎が『日本戯曲全集第十巻　初代桜田治助集』に翻字し収めたと思われる伊原青々園旧蔵本（現演劇博物館所蔵、ロ16—397—1～4の四冊）が現存する。貸本屋系統のものと思われるこの本には、表紙に場割が記されず、代わりに一から四の数字が付されている。その中で、渥美清太郎が「鶴ヶ岡の場」とした場が、『館結花行列』の「長谷寺の場」に類似している。

両作品の各場は、板付きの役者達による短い場面を見せた後、すぐ大姫及び岩藤と尾上、腰元達の登場で始まる。そして花見の場面になり、大姫が出家の願いを述べる。岩藤は、大姫を自分の弟の主税に嫁がせるために大姫の出家に反対し、大姫の意志を尊重する尾上と対立する。岩藤は、尾上の腰元の不義を問題にしたり、香炉（あるいは硯）の御家の重宝が尾上（あるいは尾上の腰元）により割られるよう謀ったりして、尾上を困らせるが、尾上は大姫の慈悲と自らの機知によって、岩藤の弱みを握ることができる。皆退場し、残った岩藤の一味は、大姫の許嫁である清水冠者義高調伏の企みをする。以上が、両作品の共通する筋の流れである。『春錦伊達染曾我』の場合、曾我物語とお初徳兵衛の世界が一緒になっているために、それぞれに因んだ場面が入っている。強いて言えば、『館結花行列』の「長谷寺の場」は、『春錦伊達染曾我』の「鶴ヶ岡の場」から曾我とお初徳兵衛に関わる場面を除き、役名を少し変えてできたとも言えるぐらいである。『館結花行列』において『春錦伊達染曾我』が、どのように改変されたのか、一例を挙げる。[3]

『春錦伊達染曾我』

尾上　畏まりました

ト尾上取つて、香炉を取上、下座へ下がらうとする。岩藤後より尾上を突き倒す拍子に、香炉を落し、微塵に砕ける。ト驚く。恟りする尾上に詰め寄せ

皆々　これは

大膳　これは尾上どの、こりやゆア致した義でござる。麁相も程があるものぢや。世に類無き淺絹の香炉、微塵となつては土くれ同前。こりや、此分では済みますまい

『館結花行列』

袖浦　畏りました

ト大姫が側にある硯箱を持て下らふとする。此時、岩藤、袖浦が後より褄を踏まへ一寸突倒す。これにて袖浦転ける拍子に持たる硯を打割。皆々見て

皆々　それ〳〵。硯が割れたわいなア

ト恟りして袖浦硯を取上

袖浦　そりや、これお硯が

ト左門と顔見合せ、思入

岩藤　済む済まぬと云ふは常体の事。これ程大切な品をも持ちながら、何に浮かれて其よふに、手を持つた物、落さんしつた

尾上　こりや、後からこなさんが

岩藤　なんと云わつしやる

主税　ヤア〳〵、大切な御秘蔵の浪花潟のお硯。打割て済ふと思ふか

袖浦　でも、コリヤ。お局様が後ろから

岩藤　何と云わつしやる。此岩藤がどふしたと

袖浦　サア、それはな

岩藤　これいのふ。麁相も麁相による。大それた。浪花潟のお硯を持ながら、そわ〳〵と日頃から男さへ見りやきよろ〳〵する故、此様な麁相。砕た硯の言訳があるか

袖浦　サア、それはな

上段の『春錦伊達染曾我』は、尾上が大切な香炉を運ぶ際、後から岩藤に突き倒され、香炉を割ってしまう場面である。引用からも分かるように、下段の『館結花行列』の同場面は、香炉が硯に、尾上が袖浦に変わり、台詞の前後があるだけの相違で、台詞の内容もほぼ同じである。台帳の裏表紙に、この場の作者と記されている奈河七五三助は、「此人、天明より文化の末まで永く此道に染ながら、多くは院本を沢文(キリハメ)し物、或は古狂言を添削するのみにて、一部の趣向立たる物少し。それ故戯場者流より、洗濯物の七五三助と異名を附たり」（西沢一鳳著『伝奇作書初編』天保十四年〈一八四三〉自序）というような評価を受けていた。この評価を念頭に、右の作品の引用部分を見ると、なるほど奈川七五三助は治助の『春錦伊達染曾我』の台帳を多く参考・引用して『館結花行列』を書いた事が分かる。

『館結花行列』の執筆には、『春錦伊達染曾我』の立作者である治助が同座していたので、七五三助が治助の指示を受け、『春錦伊達染曾我』を多く利用したとも考えられる。一方南北は、それにかなりの添削を加えている。添削の大半が、貼り紙による修正であるため、修正以前の内容を確認することは簡単ではないが、3の十四丁ウと十五丁オは、丁の余白に添削されたので、内容が確認できる箇所である。

岩藤の腰元四人は、惚れている荒川左門（九世森田勘弥）との取り持ちを奴八百平（市川八百蔵）に頼んでいる。しかし、その仲立ちがうまくいかない故、四人の腰元は左門を引き留め、口説き始める。その場に八百平が取りかかり、腰元達に各自の帯で自らの目を隠させ、左門と八百平から暫く離れていると、恋が叶うと嘘をつく。

八百平　よし〳〵。かうしておいて、何処(どこ)ぞずつと、あつちへ遠のいた〳〵

（略）

四人　かうかへ〳〵
八百平　イヽヤまだヽ〳〵
菊野　ヲヽ、その様(よふ)に跡へ寄(よ)つたら
四人　留場の口へ、出てしもふわいなア
八百平　そんならそこらで、すゞんでいたり
四人　さらば恋の返事を待たふか
八百平　サア、邪魔は払ろふた。左門さま
左門　段々〳〵の志し
八百平　イヤ、これはお礼に痛み入ります
四人　モウ、お返事が有そふな物じやが
左門　あの厚(あつ)かましい。云ふ事聞(きく)やいの
八百平　馬鹿な面(つら)ではござりませぬか

左門　そふして、袖浦が最前の返事は
八百平　そこは、抜からぬ八百平奴。ちやんと返事は
　斯の通り
　ト状を出し渡す
左門　ヱ、忝ない
八百平　コレ〇マアござりませ
　ト唄になり左門、八百平下座へは入る。ト鳴滝
　法師うそ〳〵と出て来て
（略）
桐島　コレ、そこらに美しい勘弥に似たお若衆はい
　やしやんせぬか

右は、浄瑠璃『加々見山旧錦絵』の、岩藤が横恋慕する桃井求馬に手紙を送る場面の書き換えである。作者の七五三助は、四人の腰元が色事をしかけると、その仲に立っていた奴八百平が腰元達をうまく騙して逃げる場面を作っている。このうち、左門の「あの厚かましい」以下の台詞から、左門と八百平の退場の前までの削除が指定され、代わりに以下の内容が余白に記されている。

左門　返事と云へば八百平。ソレ、其方に頼んだ事
　は
八百平　ヲツト、皆迄。おつしやるな
　ト木陰より松がへを連て来り
　ソレお約束
　ト突やる
松がへ　やア、、、左門様
左門　松がへ殿
松がへ　たんと噺が有わいなア
　ト寄り添ふ
左門　サア、其噺もかたいお館。思ふ様にならぬ故
松がへ　書て置た此文。コレ読で下さんせいなア
　ト文を出す
八百平　モシ、そんな文は、何時でも読れる。人のこ
　ぬ間に、松がへ様、アノ別当の小座敷で
松がへ　じやと云ふて
八百平　ハテ、何やら甚酌置にして
松がへ　そんなら八屋平
八百平　ドレ、休息所で□□大通で出かけべいか

追加をした人物は、前掲の「大南北自筆の添削が数ケ所発見される」という河竹繁俊の指摘を踏まえ、南北の添削としたい。添削前は、四人の腰元を騙した二人が腰元等を嘲笑いながら逃げる単純な場面だが、添削後は左門の恋人が現れ、濡れが加わった場面に変わっている。全体の筋の

上では、尾上の難儀の原因になる手紙が、左門の手に渡される添削前のままでもよい。しかし南北は、手紙だけでなく、不義の相手の松がへまでを登場させ、左門との濡れ場を作り、より視覚的な演出に変えている。左門を演じた九世森田勘弥は、享和元年に名跡を襲名[4]して五年足らずと、まだ若年であったと思われる。左門と松がへが下座へ入った後、残された四人の腰元の一人である桐島は、「美しい勘弥に似たお若衆」と言いながら左門を探す。南北は、右のような楽屋落ちを利かせ、勘弥を引き立たせる添削を行ったと思われる。

配役を考慮した添削の例は、他にもある。左門の「そふして、袖浦が最前の返事は」という削除後の台詞から、左門の不義の相手は袖浦であったことが分かる。左門の不義は、尾上に難儀をかけるために仕組まれているものであり、相手が誰であってもたいした意味は持たない。松がへにこの役割を与えたのは、袖浦を勤めた市川瀧之助には香炉を割る場面が与えられていたからであろう。南北は、瀧之助と松がへを演ずる四世中村七三郎の二人が均等に活躍できる筋に変えたのである。つまり、左門の不義を、「そふして、袖浦が最前の返事は」という台詞で処理するよりは、七三郎を舞台に登場させ、勘弥との濡れ場を見せることで、七三郎の見せ場を作ったのである。

南北が関わったと思われる、もう一つの例は、3の二十五丁オにある。

岩藤　すりや、アノ、それが
鳴滝　先達て申た通り、土中へこれを埋て置ば一七日のその内に、命を取るは愚僧が受合
岩藤　太義で有ッた。常〳〵は役柄ゆへ、むさ苦しい金銀なぞは手にふれねども、そなたに逢ふた時はと、用意した此金子
　ト箱より袱紗に包し百両包を出し
　そちへの褒美
　ト投て遣る。鳴滝恟り驚き
鳴滝　ヱヽ、こりや、百両。そんなら是を私へ
岩藤　口数聞ずと早ふゆきや
鳴滝　有難ふございまする
　ト懐中して花道へ急ぐ。岩藤思入有りて懐剣を手裏剣に打つ。鳴滝、これに当てたぢ〳〵と舞台へ来て倒れる

右は、義高の調伏を企む岩藤が、鳴滝法師（坂東大吉）から呪い人形を受け取る場面である。鳴滝から人形を貰った岩藤は、直ちに口止めのため鳴滝法師を殺す。渥美清太

郎が『館結花行列』を「系統別歌舞伎戯曲解題」の四十六回（前掲書）に紹介する際、「この脚本に初めて初瀬寺花見の場が生れ、岩藤が医者を斬つて奸悪を示す演出が植え、完全な序幕の体を成した」としているように、右は岩藤の悪が際立つ演出になっている。右にも添削の跡があり、以下の内容が鳴滝の台詞「先達て申た通り（略）受合」の後ろに追加された後、全部削除の表示がされている。

ト四人惋りして

四人　そりや、アノ誰をな

岩藤　清水の冠者義高さまは

ト菊野合点の行ぬ思入

菊野　モシ、お局さま。その冠者義高さまは

桐島　先達て御最期ゆへ

鶴尾　お言号の姫君さま

筑地　それで御出家遊ばしたい

四人　思し召しではござりませぬか

ト岩藤思入有て

岩藤　成程。こりや、こなさんは知らぬはづ。先達て鎌倉へお首でござつた義高さまは、ありや偽り。それ御存で頼朝公、そのまゝに御詮義なきも、一ト度は、聟がねと遊ばされし御不便ゆへ、助ケ置るゝ深き後賢慮。それじやによつて、清水の冠者無事でござるといふ事を、姫君聞へたは、弟主税が望は叶ぬ。それ故殺してしもふ調伏

四人　成程なア

鳴滝　モシ、お局さま。私へは御約束の、どふぞお金を下さりませ。大きに骨を折りましたはへ

右は、付箋により追加されていて、清書の後追加されたと見られる。追加部分の筆跡は、3の筆跡と変わりはなく、台帳作成の初期に五立目を執筆した人物（奈河七五三助）、あるいは清書した人物による挿入だと思われる。岩藤による調伏の手伝いをした鳴滝法師の殺害は、腰元達と岩藤の台詞がある削除前の演出では、緊張感が弛んでしまい、その台詞がない演出と比べ、残忍な岩藤の姿が薄い。南北は、岩藤の印象をより強烈にするために、無駄な台詞を省いたと思われる。同様の趣向と演出は、文化十年正月上演の『例服曾我伊達染』（森田座）においても使われている。(5)

宗益　望の金子千両箱、あなた御持参でござりまする

官兵衛　いかにも。源太、籠の内のしな、これへ

源太郎　こゝろへました

ト源太郎、駕の内より千両箱を出し、真中へお

き、
官兵衛　やくそくのとふり、金子と引きかへの薬り受取ふか
宗益　なるほど
　ト宗益、懐より薬包み大分いたし、千両箱の上にて調合の思入あつて
　イザ
官兵衛　いかにも、たしかにうけとつた
鬼貫　それ、金子をあらためへ
宗益　これがあらためずにいられませふか
　ト千両箱の蓋をあける。ドンと音して煙硝火ぱつとたち、宗益、ウント即死する

謀反人の官兵衛が、毒薬を宗益から貰った後、口止めのために宗益を殺す場面である。ここでも、謀反人の極悪な姿が簡潔に描かれていて、廻り舞台で右の場面になり、宗益の死後、再び廻り舞台で次の幕へ替わる、短くて無駄のない演出になっている。『館結花行列』の引用の部分においても、長い台詞が削除され、短い幕になっていることは『例服曾我伊達染』と同様である。

右の省略された義高の生存という事実は、次のように、「六立目草履打ちの場」（4の七丁オ）において語られる。

岩藤　姫君と言号の義高。何時ぞや江州におゐて佐々木家の為に首打れしとは偽り。誠は未だ此世にながらへいるよし。それ故の調伏。大望叶へば、姫とそなたを夫婦となす岩藤が兼ての望み

この台詞も、貼り紙の上に記されており、先述の五立目における削除が行われた後で追加されたものと思われる。六立目の右の部分は、六立目の他の箇所と同筆跡であるので、六立目を担当した者による添削としても無理はない。五立目に添削が行われ、それが南北の担当した場面に移されたことは、添削を南北がした傍証にもなるだろう。

三　六立目

六立目には、五立目に登場していなかった立女形の五世岩井半四郎が、お初の役で登場する。現行のお初の型は、古井戸秀夫氏によると「四代目岩井半四郎を受けて五代目半四郎が確立」（河竹登志夫監修、古井戸秀夫編『歌舞伎登場人物事典』、白水社、二〇〇六年）した。文化元年五代目を襲名したばかりの半四郎は、尾上を勤めた老齢の瀬川路考とともに、文化三年中村座の中心的な女形であった。南北は、そのような半四郎を登場させ、滑稽な場面を見せる。

菊野　ほんに、それ〳〵、わしが頼んだ事が有たはい

のふ
お初　こんな無理な事を被成まするとも、調へて参じました。アノ、べつかうの
菊野　ア、、コレ〳〵。わしが悪かつた。モウ、無理な事はせぬ程に、早ふその鼈甲が見たいの
桐島　わしが頼みの物も買ふてたもつたかや
お初　お気に入りますよふにと拵へまして、ハイ、調へて参りました
菊野　早ふ見たいの。御殿へ来る小間物や幾人か来ても、小そふてもどかしい。定めて太い長ひ物で有ふのふ
お初　ハイ〳〵、注文通りを取て参じました
菊野　いつそ、モウ、見ぬ内から気に入たよふなはいの
お初　さやふなら、お目にかけませふ　○
　ト紙包の鼈甲の鬢差しを出し
　モシ、よい恰好でござりませふがな
菊野　ヲや〳〵、コリヤ、鬢差しではないかいの
お初　ハイ、御注文の鼈甲でござりまする
菊野　けしからぬ。わしが頼んだ鼈甲は鬢差しではないはいの
（略）
桐島　わしが頼んだ揚げ物は、どふじやへ
お初　ハイ、上げ物も取て参じましたはいな
　ト丈長の上元結を出す
桐島　ヲや〳〵、コリヤ丈長の元結じやないか
お初　ハイ、よふあげましたじやござりませぬか
桐島　ヲ、先き、わしが頼んだ揚げ物は、内田の前に居やる、おさつや蛤の天ぷらの事じやはいの

五立目にも登場して、左門に濡れかかった岩藤の腰元の四人は、お初に買い物を頼んでいる。菊野が頼んだ鼈甲というのは、淫具の張型の異称である。菊野は、屋敷に出入りする小間物屋に頼んだ物は、小さくて物足りないと言って、お初に買ってくれるよう頼んだのであった。しかし、お初が買ってきたのは、鼈甲の鬢差しであって、包みが大きかったので、「見ぬ内から気に入たよふなはいの」という菊野の期待感は、お初が取り出す鬢差しによって失望へ変わり、観客の大きな笑いをとったはずである。こうした工夫は、桐島の揚げ物にも使われていて、天ぷらを頼んでいた桐島に「よふあげましたじやござりませぬか」と、上元結と勘違いして言い返す半四郎の言葉にも表れている。この滑稽な場面の前には、幕上げからお初の登場までの間、

四人の腰元が灌仏会について話す場面が、一丁程度で書かれていたが、削除の表示があるので、上演までには至らなかったと考えられる。実際の上演では、六立目は右のような滑稽な場面で始まり、五立目終盤の緊張感が漂う雰囲気を一転させたのである。

滑稽は、よく取り上げられる南北の特徴である。三升屋二三次の『作者店おろし』（天保十四年〈一八四四〉序）には、「俵蔵の昔はおかしみの狂言を書て」とあり、岩本活東子の『戯作者小伝』（安政三年〈一八五六〉）にも「生まれつき滑稽を好みて、人を笑わすことを業とす」とあって、「南北＝滑稽」の図式が成立していた。この考え方は、近代以降の南北の研究にも受け継がれ、「南北が得意とせるは世話狂言にして、巧みに市井の風俗と流行とを穿ち、且つ其の間に滑稽の趣を尽し」（伊原敏郎著『近世日本演劇史』、早稲田大学出版部、一九一三年）というような評価がなされてきた。しかし、一言で滑稽と言っても南北の初期作の滑稽の場面は、後期作のそれとは違っていて、『館結花行列』の如く、筋とは関わりのない独立した滑稽の場面が設けられる特徴がある。このような特徴は、郡司正勝が「小幕作者時代と道化方」（『鶴屋南北』、中央公論社、一九九四年）において、いくつかの例を挙げて説明している。『閏訥子名和歌誉』（寛政六年十一月、都座）の三立目について、「三立目、あざらし入道。水びやしにて午（牛の誤刻カ）に引れての出。面白し〳〵。次にあひるの血汐を飲ませてのおかしみは出来ました〳〵。俵蔵殿と見へます」と『役者恵宝参』（寛政七年刊）の記事を引用し、南北の滑稽の評判を説明している。『閏訥子名和歌誉』は、並木五瓶が江戸に下っての初作品であったが、「何だかこんどの狂言はねつからわからぬ」とのような酷評を浴びた。その中で南北の担当部分だけは、好評を得たのである。ただ、右の三立目のあざらし入道の件は、「どうあざらし入道が登場してくるのかはわからぬ」（郡司、前掲書）と述べているように、あざらし入道の登場は唐突であり、他の筋との関わりは無いように思われる。『館結花行列』の半四郎の滑稽の場面と同様、筋と関係が薄い滑稽だけの場面になっている。『閏訥子名和歌誉』の場合、南北は五枚目の作者であったので、自分で狂言の全体的な構成をすることが出来なかったためであろう。『館結花行列』の滑稽な場面も、このような傾向が表れた結果である。

以後滑稽は、南北が立作者としての地位を確立し、作品の全体を統括するにつれ、作品の筋と融和したものとなっていく。二つ実例を挙げよう。まず、文政六年正月、市村座上演の『八重霞曾我組糸』である。

鬼王は、買ってきた蛸が見えないと、仏像が自分の蛸を食べてしまったと思い込んで、仏像に飛びかかろうとする。一緒にいた禅司坊は、鎌と石を使って切り火を打ち、鬼王を静める。この滑稽な場面の後、次の場面へ繋がる。

禅司　いはゞ敵の弟御と
鬼王　思へば無念な
　　トきつと立ち、ツカ〳〵と行き無念のこなし
七郎　そりやこそ怒つた〳〵
岬　　コリヤ、鎮めて〳〵
　　ト押へる。閉坊心得、件の鎌にて鬼王に火を打ちかける。これにて鬼王、力んだまゝ、グンニヤリ
　　となる。

鬼王と、鬼王の主筋の禅司坊は、敵の工藤祐経の弟に合う。鬼王が怒りのあまり、敵に立ち向かうと、傍線部のように閉坊が前の滑稽の場面で使われた切り火を打つ。滑稽な要素が巧みに筋の展開の中に取り込まれているといえよう。

次は、文政八年七月市村座上演の『東海道四谷怪談』第二番目三幕目である。

直助　伊右衛門さま。なるほどおまへは
伊右　このよふに、あくもみよふ見まねに
直助　たれを見まねに
伊右　おぬしが仕ぐさを
直助　アノ、わしがふだんを
伊右　見ならつたのよ
直助　誠にかんしん。○奇妙

伊右衛門を勤めた七代目市川団十郎は、実悪の演技を、直助に扮した実悪の名手五代目松本幸四郎に習ったという楽屋落ちである。それを聞いた直助は、「奇妙」と反応する。直助は、作品の所々において口癖のように「奇妙」と言っている。この「奇妙」という言葉は、直助が二番目序幕に薬売りとして登場した際、口にしていた台詞を利用したのである。花道から「藤八五文、奇妙」と呼びながらの出端は、当時の流行であった香具師の薬売りを用いた趣向[6]である。南北は、序幕の出端で使われた短い言葉を、後の三幕目にまでも引き出して滑稽に使ったのである。やはり、言葉遊びを利用した滑稽を筋と絡めて使っていることが分かる。

こうした例に対し、南北による『館結花行列』六立目の引用箇所は、性的な冗談や言葉遊びに重点が置かれ、狂言の筋との融和に欠けているといえる。まだ、全体の筋を統括する立作者としての経験が不足していた結果であろう。

このような欠点は、後期になるにつれ、滑稽がうまく筋の中に取り込まれるようになり、解消されるのである。

おわりに

以上『館結花行列』を通して、初期南北作品の特徴を探ってみた。

まず、五立目は、作者が奈河七五三助になっているものの、南北による添削の跡を確認することができた。南北は、濡れ場を加えたり、役者を均等に使ったりして、まだ江戸歌舞伎に馴れていない七五三助が執筆した幕を添削したのである。

また、六立目の始めの場面に見える滑稽の場面からは、全体的な筋より一場面の面白さを優先した過渡期の南北の特徴が垣間見える。

【注】

（1）ロ16の資料は、早稲田演劇博物館設立の企画の際、蔵書家である小林文七から購入した資料である。菊池明氏の「絵本番付の朱筆書入れについて」（早稲田大学坪内博士記念演劇博物館編『江戸芝居番付朱筆書入れ集成』、早稲田大学出版部、一九九〇年）や鳥越文蔵他編『朱筆書入れ　江戸芝居絵本番付集（一）』（早稲田大学出版部、一九九二年）の解題に詳しい。

（2）天明三年三月、市村座上演の『寿萬歳曾我（ことふきばんぜいそが）』に、草履打ちの趣向が確認できる。伊原敏郎著『歌舞伎年表』第四巻（岩波書店、一九五九年）に「幾蔵の近江小藤太女房久須美。（略）連理が解きし帯を捉へて不義なりといひかけ、草履にて打擲。理口丈に殺され、早変りにて下男となり、連理が供して入る（此の草履打は隣座の〈鏡山〉に張合ふためか）」とあり、一見曾我の世界と鏡山の世界が綯い交ぜになっているように見える。しかし『寿萬歳曾我』は、伊原敏郎の指摘通り、隣座の『増補加々見山旧錦絵』（森田座）に対抗するために、鏡山以前にも不破名古屋物などに登場していた草履打ちの趣向を利用したに過ぎず、鏡山の筋を取り込んでいるとは言い難い。

（3）以下底本の引用に際しては、読みやすさを考え、適宜底本の平仮名を漢字に改め、原文の平仮名を振り仮名として残した。また句読点、濁点を加えた。さらに台帳で役者名で記されているところは、論の都合上役名に改めた。

（4）『役者一口商』（文化二年刊）の森田勘弥の評に「享和元酉の冬（略）子息へ森田勘弥の名をゆづり」とある。

（5）引用は、『鶴屋南北全集　第十二巻』、三一書房、一九七四年による。以後、底本以外の南北作品の引用は、同全集による。

（6）藤八五文の薬売りに関しては、郡司正勝校注、新潮日本古典集成『東海道四谷怪談』（新潮社、一九八一年）の注に詳しい。

〔付記〕資料閲覧のご許可を頂きました早稲田大学坪内博士記念演劇博物館に深謝申し上げます。